

福島第一原発事故による避難の経験を交差させて考えてみたいという点が、今回の研究会の狙いです。

環境社会学会の会員は、連字符社会学としての社会学者の方は3~4割ぐらいだと思います。それ以外の会員は広く「環境と社会」学の領域だと思いますが、今回の企画は、どちらかというと連字符社会学としての環境社会学の議論を前提に、そこでライフコース論を中心とした家族社会学の議論と交差させて、新しい議論が展開できればよいと思っています。

まずきょうの登壇者の方をご紹介したいと思います。第1報告は、福島大学の廣本由香さんです。『鳥栖のつむぎ』の著者でもあります。廣本さんから、この『鳥栖のつむぎ』の執筆を踏まえた上で、『〈つながり〉の戦後史』へのコメントをしていただきます。

2人目の報告者が、笠原良太さんです。笠原さんは『〈つながり〉の戦後史』の中で主に子どもに注目した研究をされています。『鳥栖のつむぎ』では母子避難者を対象としていますが、笠原さんは閉山によって移動した子どもの研究をされていますので、2つの書籍の共通点も指摘していただければと思っています。

コメンテーターとして『〈つながり〉の戦後史』の編者でもある嶋崎先生にコメントをしていただきます。環境社会学会側の方は万能な議論ができる大倉さんをお願いしました。

では、マイクを廣本さんに移したいと思いますので、よろしくお願いします。

## ■『つながりの戦後史』を読む（廣本由香（福島大学））

廣本：福島大学の廣本です。よろしくお願いします。

今、西城戸先生からの解題にもありましたけれども、私の報告からは、2冊の書籍を並べることで、広く何が考えられるのかということをも今回の報告で示せていけたらいいと思います。一応、2冊の文献を読んでいるということをも前提に話を進めさせていただきます。

私のほうからは、内容を詳しく分析するというよりは、広い視点を持って何が考えられるのかということをも、コメンテーターの先生とZoomで参加して下さっているフロアの皆さんと一緒に考えていけたらいいと思います。

今回は研究例会ということで、学会発表とは違いますので、皆さんのお知恵をお借りしながらおもしろい議論ができればいいと思っていますので、よろしくお願いします。

まず簡単に、『〈つながり〉の戦後史』について私のほうから少し紹介しますと、今、ここにいらっしゃる嶋崎先生や笠原先生がまとめられた『〈つながり〉の戦後史 尺別炭砒閉山とその後のドキュメント』というもので、北海道の尺別炭砒を舞台に、戦後、日本がたどった産業転換と労働力移動というのを、歴史の内側から移動・つながり・故郷をキーワードに、炭鉱労働者と、その家族の経験を描き出しています。

嶋崎先生の言葉を借りると、〈つながり〉というのは、「労働者コミュニティのメンバーが危機的で不安な状況に直面した際に、多様な縁を自覚的に結び合わせて対処する能動的な側面」と説明されています。ここで言う「縁」というのは、職縁、血縁、学縁、地縁のことを指しています。

これを受けて、〈つながり〉ということに着目したいんですけども、私の報告からは、産業構造の転換や大規模災害であったり、仁平先生の「災間」という概念が環境社会学でも用いられていますけれども、こうした不安定な社会や危機的状况における〈つながり〉というのを、「家族戦略」という概念から考えたいと思っています。

それでは、何で〈つながり〉に注目するのかということが大事になってくると思うんですけど、〈つながり〉には多様な役割があったり、作用、働きがあります。その中でも〈つながり〉は公的なセーフティーネットではカバーできない領域で発揮されるという点と、なぜそれが今の社会で、今のこういった不安定というか、混沌とした社会で必要なのかということを考えたいと思って、今回、〈つながり〉に着目しました。

セーフティーネットという言葉を使っていますけれども、この言葉が適しているのかどうかというのはちょっと考えたいところですが、ほかにいい言葉がなかったのでも、暫定的にセーフティーネットという言葉を使っています。

また、ここで注意しなくちゃいけないことというのは、〈つながり〉という用語が持つ温かさ、すごく包み込むような言葉であって、それを無条件に受容してしまうことだと思います。

第9章の嶋崎先生の文章を引用しますと、「炭鉱閉山によって解雇された労働者とその家族が経験した再就職と移動は、炭鉱で培ったさまざまな『縁』を活用して展開された。とはいえ、それは『協力して、一緒に乗り越えよう』という〈つながり〉の活用ではない。むしろ、エゴイズムが露呈した場面だったとさえいえる」という指摘があります。こういった嶋崎先生の説明にもあるとおり、危機の中での〈つながり〉というのが平時とは異なる働きをする場合があることだと思うので、〈つながり〉が無条件にいいものではなくて、そういったネガティブな面もあるということ念頭に置きながら考える必要があるということです。

もちろん〈つながり〉ということはすごく大事だとは思いますが、ここで同時に着目しなくちゃいけないのは、どんな「縁」を活用してつながっていくのか、あるいはその組み立てや組み替えであったり、あとは逆につながらないということ、そういったことにも目配せする必要があるのではないかとということです。

今回の研究会では、『〈つながり〉の戦後史』とともに、関礼子先生と編著でつくりました『鳥栖のつむぎ』、2014年出版なので結構前のものなんですけれども、これを取り上げさせてもらいます。

何でこの2冊を取り上げるのかということなんですけれども、『〈つながり〉の戦後史』の共著者である木村至聖先生が第1章でこんなことを言っています。「つながりはただ懐かしまれるだけの過去の思い出では決してなくて、混迷する現代社会を生きるための希望の道しるべであり得る」と述べていて、さらに、「移住先や定着や移住後の新たな人間関係の構築から得られた知見について、東日本大震災による避難者の移住あるいは外国からの移民らの事例について考える際も、状況は違って、少なくない示唆を与えてくれる」とも述べています。こういった木村先生の言葉も受けて、この報告では話が行ったり来たりしてしまっ、ちょっとわかりづらくさせてしまうかもしれないんですけども、この2つの本の事例を並べて論じていきたいと思っています。

とはいえ、この2つの本の違いも考えなくちゃいけなくて、エネルギー産業に端を発する社会問題を扱っているのですが、尺別炭鉱閉山と福島原発事故では、時代背景も全然違いますし、発生過程も大きく違ってきます。あとは嶋崎先生グループと関礼子グループの対象へのアプローチ法や記述方法も異なるということです。そこには、ちゃんと注意しなくちゃいけないなと思います。

でも両者に共通することを挙げるとすれば、それは、地域の移動前後のライフ、「生」ですね。「生」を追ったドキュメントであるということです。

あとは、研究者向けの学術書というよりは、当事者の関係者のための記録として編まれた書籍であるということですね。

『〈つながり〉の戦後史』のほうは、尺別炭鉱の移住・定住ということで、『鳥栖のつむぎ』のほうは、原発事故による避難が取り上げられていて、両者とも移動の基本単位として家族に焦点を当てているということは共通することだと思います。

ただ、そこには違いもあるので、そこも考えなくちゃいけなくて、尺別炭鉱の労働者家族というのは、笠原さんが第7章で指摘されているとおり、「尺別炭鉱の家族は、都市部から離れた山峡の尺別にとどまるという選択肢はなかった。住民たちは短期間のうちに転出を余儀なくされ、地域は急激に崩壊した」ということがありますし、初めから移住・定住を見据えた移動だったということですね。

他方で、原発避難者、特に『鳥栖のつむぎ』で取り上げている自主避難者というのは、事故収束によって元の居住地に戻ることも想定に入れた、そんな移動だったということです。

こういった違いから、両者を一括りに論じることというのは慎重にならなくちゃいけないと思うんですけども、ただ言えるのは、どちらも予期しない地域の移動であって、あとは、結果的に移動というのが家族生活や生活設計に大きな変更を迫るものであったということで、いずれにしても、予期しない家族の移動というのはライフコースに大きく影響するというか、関わるということですね。この辺は、嶋崎先生や笠原さんのご専門だと思います。

この報告の目的に「家族戦略」という概念を持ってきていますので、これについて簡単に説明させていただきます。

田淵六郎先生の説明によりますと、「家族戦略」というのは、「家族を単位として行われ、家族の社会的地位と社会構造を再生産しつつ行われる適応的行動を指す分析概念」で、「構造決定論的な説明でも主体性というのを過度に強調した説明でもなくて、行為者の主体性と社会構造との接合というところを捉えようとする概念」とされています。

この説明にもありますように、「家族戦略」を用いる際に気をつけなくてはならないのは、この「戦略」という用語によって、行為者の主体性というのが過度に強調されてしまうということです。この報告で取り上げる炭鉱労働者家族と原発避難者家族も、広い意味で国の政策とエネルギー産業の転換と危機に翻弄された上、切迫した状況によって移動をせざるを得なかったことですね。それを鑑みれば、移動は必ずしも自発的に行われたとは言えないということです。

こうした事故や閉山によって移動を半ば強制的にさせられたんですけども、そういった回避できない移動や、避難によって断ち切られた関係、関係喪失によって生じる孤独感とかは社会的に認識されにくいです。

第10章にこんな言葉がありまして、「住時の痕跡はほとんど見いだせない(中略)ある種の『剥奪感』」とか、そういったものは周囲から理解が得にくい状況を生んだということです。

両者とも、去るも地獄、残るも地獄といった状況下の移動であって、結果として帰れない故郷、帰らない故郷を生み出した点は両者とも似ています。

ちなみに、スライドで映像を流していますが、これは福島の大熊から富岡に行く道です。こういった状況が今も被災地では続いています。

ふるさと剥奪を論じる関礼子先生は、「故郷とは外部の視点から捉えなおされた地元(共同体)である。避難を強いられた住民が、外部から地元をみて、そこを故郷と認識したときに、故郷喪失が始まる」と指摘しています。

第11章で笠原さんが述べられていることもすごく似ていて、炭鉱閉山や離散によって生じた故郷も周囲に理解を得にくい出来事ということなんですけれども、それは長期化しつつある原発避難によって発生した故郷喪失に対する反応と似ているところがあります。

以前は、地元や故郷というのは、家族の間で共有できるものとして存在していましたけれども、炭鉱閉山や原発事故によって、同じ家族、親族といえども故郷に対する意識や受けとめ方に違いがあらわれるということです。

原発避難者家族の場合は、事故や避難時から10年あまり経っていますが、事故当初、まだ幼かった子どもたちは、被災や避難に対する記憶が薄かったり、ほとんどなかったりします。成長するにつれて、避難元は自分の地元というよりかは、お父さん、お母さんとか、おじいちゃん、おばあちゃんの故郷という見方することも珍しくなくて、中には、避難先、移住先を地元と認識する子どもも増えています。故郷喪失の理解に関しては、家族と社会の間の認識のずれと同時に、家族の中でも世代の差異が見られます。

こうした時間の経過や世代によって浮かび上がる違いというのは、この報告の中心テーマにした〈つながり〉ですよね、その〈つながり〉にも影響を与えて、例えばこれは福島のことですけども、子育て世帯は避難先に移住して、高齢者世帯は避難元へ帰還するといった現在の被災地の状況を生み出している1つの要因ともなっているということが言えます。

ここから、「家族戦略」というところにピントを合わせていきたいと思います。ここからは引用が多いんですけども、「拡大家族」と「擬似的な家族」という観点から見ていきたいと思います。炭鉱では、家族とか親族関係にある者同士が同じ職場で働くことが多かったと書かれていまして、そこでは直系親族の価値が弱く、傍系家族・親族関係が広く重視されていました。

炭鉱労働者家族の生活は、家族中心主義に立つ家族戦略に基づいて展開して、そこで活用されたのが血縁や姻縁や、直系や傍系といった家族・親族の「縁」だったと指摘されています。

こうした家族とか親族関係、ここの『〈つながり〉の戦後史』で言うと、血縁の「縁」になりますけれども、その関係が重なり合いながら、そこから拡張して成立する「家族のような密接な人間関係」とか、「温情主義的な主従関係」がつけられていったということです。

いわゆる「拡大家族」ということだと思えるんですけども、隣近所、コミュニティにも開かれていたということですね。炭鉱コミュニティの存立基盤には炭住というのがあるというふうに説明がありましたが、それは、日常的な、安定的な労働力の供給源であって、再生産の場として機能することで、生産現場、生産活動に組み込まれていたということが言われています。

その例として、生産を支えてきた精神に「一山一家」があります。尺別炭鉱社内報の「やまの光」には「我々従業員は全員で同じ方向に向かって力を協せて舟を漕いでいるのである。一人でも反対に漕いではならない。思想的に方向の異なった人々には舟から降りてもらわなければならない。親切の心が親を切るようなことになる」というふうに記されていて、こういったことから、炭鉱会社の強いトップダウンというか、強い統制下で排除が働いていたということが指摘されています。

こういった強い関係があったんですけども、炭鉱労働者家族の暮らしと〈つながり〉は、やっぱり固有の存立条件を有する石炭産業だけに当てはまるものであって、そのヤマの〈つながり〉というのは、炭鉱での仕事・職場があってこそ成立し、閉山時には極めて限定的なものにとどまざるを得ないと言われています。

なので、閉山による再就職と移動は、炭鉱で培ったさまざまな「縁」を活用して展開されたということです。とはいえ、それは「協力して、一緒に乗り越えよう」という〈つながり〉の活用ではなかった。むしろ、エゴイズムが露呈した場面だったということが言われています。この一連の関係、ヤマの関係とかを含めると、閉山時においては危機的な状況だったということで、そこは職縁ではなくて、血縁に頼るというのも1つ、〈つながり〉の「家族戦略」であったと捉えられるのではないかとということです。

こういった労働者家族は、急速に変化する石炭産業自体の衰退過程に呼応して、生活手段と方策の具体的な形態、すなわち暮らし方と〈つながり〉のあり方を柔軟かつ迅速に変更した。家族内でも、世代間で家族の暮らし方や〈つながり〉の受容の仕方は異なったという指摘があります。

この暮らしの違いや、世代間の違いというのが結構大事だと思っていて、この世代間の差異というのは、移動後の新たな故郷であったり、帰れない故郷に対する受けとめ方や、その後の関わり方というのに影響を与えて、例えばですけど、第11章の東京尺別会のことであったり、第12章の広島と同郷集団の中での〈つながり〉の変化というところにもつながっていくのではないかとということです。

ただ、見方を変えれば、それは移住後の集団の新たな〈つながり〉が築かれる可能性として、良い面なのではないかということで、かつての血縁とか地縁といったすごく強い〈つながり〉、直接的な援助とか、職のあっせんとか、そういった助け合いを目的とした固い〈つながり〉ではなくて、心のよりどころになるような居場所やアイデンティティのような緩くて柔らかい〈つながり〉への変化が見られていくのではないかと。そういった変化も、この本は長い目で見ていないかということが言えます。

炭鉱労働者家族の例から血縁・職縁・社縁を中心に見てきましたが、次に、移動後の新たな縁による〈つながり〉の構築を、不安定な状況を乗り切る「家族戦略」として捉えてみたいと思います。

先ほど嶋崎先生が指摘したエゴイズムについて触れましたが、危機的な状況において既存の〈つながり〉は、平時のような必ずしも良い方向に作用するとは限らないので、そういったことを見る必要もあるのではないかとということです。

ここで引用するのは、『鳥栖のつむぎ』には収録されていないんですけども、私が2012年に書いた短いコラムがありまして、「母子避難の『つながり』」というのがあるんですけど、そこからちょっと引用したいと思います。

コラムも、Zoomのチャットで貼っておきましたので、もしよかったら読んでください。

コラムに登場するAさんは、茨城県水戸市から、幼い子ども2人を連れて佐賀県鳥栖市に自主避難した母親であって、Aさんの避難元と避難先での友人関係や家族関係に着目して、その〈つながり〉がAさんを思い悩ませてネガティブに働いた反面、避難生活を支えているということを書いたコラムになります。

読みますと、Aさんが避難を決断したときに、Aさんの両親は、「そこまでする必要がない」、「ひとりで子ども2人を背負うのは無理だ」とAさんの決断に真っ向から反対した。両親とはわかり合えないまま、子ども2人を連れて縁もゆかりもない土地に飛び込んだ。その後も、両親から孫を取り上げてしまったという感覚

はAさんから離れなかった。避難から半年たって、Aさんの父親が鳥栖を訪れた。「のびのび育てられてよかったな」という父親の言葉。Aさんの決断を父親が初めて認めてくれたときだった。だから、両親への感謝と同時に、子どもを育てるプレッシャーを感じたという。夫婦間の理解だけでなく、家族の理解、家族の支えがあって今の生活があるのだと、Aさんは家族の存在を再確認するように話してくれたという部分です。

広域避難というのは、当初は低線量被ばくを回避するためでしたが、自分の親も含めた家族全員が、その適応的行動を肯定的に受けとめていたわけではありませんでした。

避難時は、血縁、地縁といった〈つながり〉がAさんにはネガティブに働き、避難後も、その生活に影を落としていたということが言えます。

そうだったのですが、避難生活の経過とともに、親との〈つながり〉や家族との〈つながり〉、避難元との〈つながり〉というのが維持されているからこそ、避難が継続できているということをAさんは語っています。避難経過や状況の変化によって〈つながり〉がポジティブに働いたということですね。

さらに、Aさんは鳥栖での避難生活の中で、職縁と地縁から新たな〈つながり〉を築いていました。

読みますと、「鳥栖では私しかないから気を張っているんですよ。だから、一回も風邪ひいてないんですよ」と話してくれたAさんですけれども、避難先の鳥栖で「親子のような関係」を築いている人たちがいる。鳥栖にやってきて、少しでも家計の足しになればと、Aさんは手づくりのパンや地元の野菜を販売する食料品店のパートに就いた。パート先で出会った方々は50代、60代がほとんどで、その方々から見ればAさんはちょうど子世代で、子どもたちというのは孫世代に当たる。「本当の子ども、孫のようにかわいがってくれるんですよ。子どもたちを『そと孫だな』といって、サッカー観戦に連れて行ってくれたり、ご飯に呼んでくれたり、子どもたちが図々しいぐらいに慕っていて、困ったときには、その人たちが面倒を見てくれるので助かっているし、私も甘えているんですよ」。鳥栖の「おじいちゃん」「おばあちゃん」との関係は、実の親子関係でもなければ、長年の付き合いがあるわけでもない。だが、Aさんは「心地がいい」と言う。母子避難で父親不在の場合でも、いわば擬似的な親子関係が子育てを支え、避難先での生活に安堵感をもたらしているということですね。鳥栖での新たな〈つながり〉がAさんの避難生活を支えているということを書きました。

避難先で新たな地縁とか、職縁ですよ、それが組み合わせさった〈つながり〉だと思うんですけれども、それが、非血縁的ではあるんですけれども、家族のような〈つながり〉でもあったということです。

こうした「擬似的な家族」は、家族を社会に開く「戦略」でもあるのではないかと考えています。Aさんのように、避難元の地縁とか、自分の親を含めた血縁、もともとあった縁を活用するだけでなく、新たな縁、ここで言う出会いですけれども、出会いによって〈つながり〉をつくる可能性もあるのではないかと考えています。

最後にまとめていきます。〈つながり〉が危機的状況や不安定な社会によってどのように作用して、どのような意味も持つのかということを考えてきたのですが、これから日本社会では、社会基盤も、社会保障制度も脆弱化していくことは明らかだと思います。あとは、経済状況の悪化によって日本型慣行雇用みたいなものが崩れて、もう崩れていますけど、少子化とか、家族形態の変化で、従来のような家族の支え合いということもおそらく低下してしまうということです。

なぜ、〈つながり〉を取り上げる必要があったのかといえば、不安定な社会や今のような危機的な状況において、〈つながり〉というのは、政府や行政がカバーできない部分、公的なセーフティーネットではカバーできない領域で発揮されて、人々の助け合いを促して、拠り所や居場所となることがあるのではないかと考えています。それが生活に安堵感をもたらしてくれたり、時には孤独感を解消してくれたりすることがあります。

普通に生活していたら、別に〈つながり〉なんて必要ないんじゃないかなと思う方もいたり、「大した問題じゃない」と思う方もいると思うんですけれども、やっぱりこうやって震災や災害であったり、社会が不安定であったり、あとは、弱い立場に置かれた人々にとっては、それが「支え」となります。「生」や「ライフ」を支えるものになり得るということです。

最後に、第12章の木村先生のところを引用しますと、尺別から広島への移住以来、同郷集団をまとめてきた方の「語り」になります。この部分が些細というか、緩やかな〈つながり〉だなんて思って読んでいただければ

ども、「この人間そのものが故郷（ふるさと）という形に思ってもらえて、集まってもらったらね、そこに居場所がなかった人でもね、ここにいればなんとなく居心地がいいじゃないかというふうになってもらえればいいかなと思いますね。これもまあひとつのつながりだから、相談したり、『あ、そだ、あそこに行ったら人がいる』っていうなかで、人が育って行って、大人になって、『あそこで、大きくなったんだ』というふうにしていくような形になれば、いいんじゃないかな」といった「語り」を取り上げていました。

こういった緩い〈つながり〉は、公的なセーフティーネットではカバーできない領域だと思います。

こうした〈つながり〉というのを説明するときに、〈つながり〉という言葉だけでは、まだちょっと説明が足りないかなと思って、今回、「依存先」という言葉を持ってきました。この「依存先」というのを使っているのは熊谷晋一郎先生で、「TOKYO 人権」のインタビューで答えているんですけども「自立をめざすなら、むしろ依存先をふやさないとイケない」というふうに熊谷先生は言っています。もちろん、熊谷先生は、障害者の自立生活から依存先というのを語っていらっしゃるんですけども、ある意味では、依存先が限られてしまっている被災者や避難者とか、そのほか移民の方であったり、マイノリティの方であったり、そういった方々にも同様のことが言えるのではないかなと思っています。

ここで重要なのは、依存先の複数化、あとは多様化であって、一方的なことではなくて、相互依存的な関係の構築というところに目を向ける必要があるということで、「依存先」という言葉を最後に紹介しました。

この「依存先」という言葉も非常に重いことのように受け取られてしまいますし、そういう印象を与えるんですけども、第12章の木村先生の章の「語り」のような緩い〈つながり〉であっていいので、そういった「依存先」の複数化や多様化が、〈つながり〉において重要になるのかなと思っています。

『〈つながり〉の戦後史』で中心的な概念として〈つながり〉というのを導入されていましたが、この本が何を広く問いたかったのかというのを私なりに考えたら、やっぱり家族を起点に、どのように他者とつながって、コミュニティとつながって、なおかつ、そのコミュニティの中で承認されるのかというところを、長期的に捉えて問うているのではないかというふうに思ったので、その辺おふたりの著者からお話が聞ければいいかなと思っています。

すみません、長くなりましたけれども私の報告は終わりにします。ありがとうございました。

西城戸：ありがとうございました。では、続いて、よろしく願いいたします。

## ■『鳥栖のつむぎ』を読む：笠原良太（早稲田大学）

笠原：早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員の笠原良太と申します。本日は、貴重な報告の機会をいただきありがとうございます。私は、国内の石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どもの進路や人生移行について、ライフコース論をもとに研究しています。とくに、地域崩壊を伴った閉山、高度成長後期の北海道における炭鉱閉山を中心に研究しています。

『〈つながり〉の戦後史』の序章にもあったように、炭鉱閉山と子どもや家族の研究をしていると、やはり2011年の原発事故によって避難を強いられている人たちのことを考えずにはいられません。時代や地域は違いますが、歴史的出来事によって移動を強いられた点では、原発事故と炭鉱の閉山は共通しています。今回、ライフコース論の視点から、『鳥栖のつむぎ』を読むと何がわかるのかについて報告して、原発事故とライフコース、さらには社会変動とライフコース研究の可能性について考えていきたいと思います。

ライフコース論は、そもそもライフサイクル論から展開して登場したもので、夫婦や家族単位ではなく、家族成員個々人の生涯にわたる発達過程に注目して、個人のライフコースの束として家族過程を捉えるアプローチです。それによって、多様な道筋をたどる家族のダイナミックな過程を観察するという利点があります。「社会変動とライフコース」研究という壮大なテーマは、マクロな社会変動とミクロなライフコースの相互作用、相互連関を動的に捉える社会学研究であって、具体的には、ある歴史的出来事を取り上げて、それが人びとや家族、地域のライフコースにおよぼした衝撃を横断的、縦断的に記述して、多元的に説明するという方法を